

求められるのが現状である。かかる現状を充分理解の上、地方交通機関としてのコンセプト如何を問い、その整合性の論理を新たに構築すべきものとする。

追記

当該万葉線を第三セクター方式により経営を継続する場合、会社資本の調達方法と

して、加越能鉄道(株)の資本参加を要請し、企業価値額の一部(行政側と同額)を現物出資とし、譲渡価格との差額については現金決済する。他は経済界及び市民を対象とした寄付又は資本参加―株主優待―により調達するのも一案。(試案)

(金沢大学経済学部教授)

CURES Salon

文化経済学会<日本> 2000滋賀大会 6/9,10 (大津) 雑感

吉野 安之

この学会への興味は、教養部から経済学部へ異動して2年目に担当することになった経済学部の新生生に対して開講される基礎演習がキッカケである。目に入った文化経済学なる用語は、早速、私にインセンティブを与えた。衝動的に注文した拾数冊の書物を机の上に積んだ。その頃の小文フォルダに、文字を長く見つめるトレーニングを始めたとの一文が残っている。経済学部での基礎体力(耐力?)もついてきたので、本年4月、学会に入会する。2000年、取りあえず、スタート地点に立つ。ゴールはおろか行く道さえ見えず、覚束ないが・・・。

さて、学会が終わって1ヶ月、今、思い出すままに書き出してみた。

初日の午前中、「文化政策・海外」の分科会1(座長は、池上 惇)に参加。事前に発表テーマ4題目はプログラムで知っていた

が、大会予稿集を当日配付されたため、事前学習ができず、理解不足で、いささか不満。参加申込み者には、少なくとも1週間前までに送付してほしいものである。発表レジュメ2題目の中に、スポーツに関連した部分を見つけ、ほっと一息、しかし、文化政策の中のスポーツの位置は見えなかった。佐々木さん(4月に金沢大から立命館大へ転出)の「イタリアにおける都市文化政策―ポローニャ2000をめぐる―」の発表を拝聴。昨年度10ヶ月の在外研の成果を随所に盛り込まれた内容で、インパクトのある発表であった。

午後、「文化政策・支援マネジメント」の分科会2に参加。音楽大関係者の発表では、特にクラシック音楽業界のマネジメントの難しさ、苦悩する姿が見え隠れし、他人事ではなかった。

2 日目、午前中「実証研究」の分科会 3 に参加。この分科会には、唯一、大学のスポーツ研究者の発表「スポーツ文化の継承と消費動向一家計における消費支出の分析から一」があった。

パソコンを使ったプレゼンテーションで、Power Point の威力(前日にも使用者あり)に感服。

座長の永山 貞則氏(日本統計協会)が分析に使用した資料について指摘した点は、詳細に報告できないが的をえていた。現象の解析に利用する統計資料について、その資料の限界を充分精査しなければならないと改めて自戒することになる。

午後、シンポジウム「文化の継承と創造」が企画されていたが、前日の雨がやみ、しかも週末、急遽、私の専門スポーツ領域であるアウトドアスポーツのメッカ・琵琶湖

周辺のスポーツウォッチングに出かけることを決め、サボタージュ。

学会会場は、琵琶湖畔で、白亜の建物・びわ湖ホールに隣接したピアザ淡海(写真が載せられなくて残念)、周辺の景観とあいまって、文化の薫りが漂う場であった。また、シンポジウム終了後に、びわ湖ホールでの声楽アンサンブル定期公演をドッキングする企画演出は、この学会に相応しいものであったが、私の文化享受能力の貧困さゆえに足が向かわなかった。

佐々木さん以外、参加者の誰とも面識がなく、新鮮にして、気楽な一方、適度な緊張感が、心地よい学会でもあった。今後、私のポテンシャルの余力をどの程度この学会に投入できるか、正直、不安でもあり、楽しみでもある。

(金沢大学経済学部教授)



S O H O 体験記～3つの困難～

赤 澤 徹 也

筆者は1998年4月から金沢大学大学院経済学研究科において社会人院生として財政学を専攻、2000年3月に課程を修了した。現在、生涯教育の一環として、社会人の再教育というものが大学に求められる時代。社会人入試制度は拡大される傾向にあり、筆者の周りにも働きながら大学に通う人間は多い。

しかし、筆者の場合は一般の社会人学生と違う点があった。それは在宅勤務という形態で仕事をしていた点である。通常、社会人教育は勤務時間外に、あるいは特別に認めてもらい勤務時間に講義を受けるのが一般的であると思うが、筆者が勤務する会社は金沢に事務所はなかったのである。当初は休職して学業に専念という話もあった